『彼岸過迄』の構想と愛の姿

加藤富一

一

漱石は修善寺の大患以後、朝日新聞との契約を果たせないことに心の負担を感じている。年に一つの長編を書く約束だったが、その期限の明治四十四年八月ごろになっても連載ができなかった。十月になっても「筆を執る」ことができない。「只だらしなく延びるのは決して心持の好いものではない」と「緒言」に書いている。さて「歳の改まる元旦から愈(いよく)書始める」ことになって、次のように決意とでもいうべきものを書く。

久し振だから成るべく面白いものを書かなければ済まないといふ気がいくらかある。（略）何うかして旨いものが出来るやうにと念じてゐる。

「面白いもの」というのは、かねてからの漱石の目標である。文壇への出発作品『猫』がそれだった。[1] 小田切秀雄氏のいうように「文学は読んでおもしろければそれでいい」[2] という考え方と同じである。ところで、「面白いもの」といっても、そう何度も猫を使うわけにはいかない。新しい「面白さ」を創造しなければならない。そこで緒言は次のように続ける。

かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。

短篇の連鎖である。この方法は古く源氏物語に見られ、これも小田切氏のいうように、はじめ作者は短篇を書いたが、女房たちが読んで、これを書写せずにおられなかった。写したのをみんなが読んだ。続きを読みたくてたまらない。おもしろいからである。[3] そして漱石は『猫』でそれと同じ経験をしている。『猫』は短篇として掲載された。しかし読者が続篇を要求した。ここに長篇『吾輩は猫である』出現の契機がある。その漱石が「個々の短篇を重ね」て「一大長篇を構成」しようとするのは当然のことと考えられる。「夢よもう一度」である。

ところで、『猫』のその方法は、思いもかけない評判が生んだものであり、漱石が『源氏物語』を意識して「個々の短篇を重ね」ようとしたのではない。『彼岸過迄』の手法は、幸田露伴が明治二十六年に発表した『風流微塵蔵』の方法を採ったのではないかと考えられる。『微塵蔵』は連環方式の大作である。そしてこれを推賞したのは、漱石の兄貴分の正岡子規であるらしい。その拠りどころは伊狩章氏の次の文章である。

子規は露伴及び「風流仏」に熱をあげ、その露伴熱が漱石にも何らかの刺激を与えたかもしれない。[4]

『風流仏』は、純愛が夢幻のうちに具象されたといわれ、露伴の出世作とされるものであるが、これや『風流微塵蔵』が子規のすすめにより漱石に「刺激」を与えたと考えられないかと思うのである。そして『風流微塵蔵』の連環方式が「かねてから」漱石をとらえたのではないかと想像できるのである。『微塵蔵』は稲垣達郎によって次のように解説されている。

幼なじみの少年少女が互いに人生の苦杯をなめさせられた後めぐりあってわずかに解脱安住の地に至るというのが基本的設定。この二人の物語を中心に、僧や画工や大陸へ乗り出す野心家や、さまざまの人物がかもし出すいくつかの物語が派生し、人生の種々相を写してゆく。（略）明治文学中、構想と方法に注目すべきもののある野心作。[5]

「人生の種々相」は「夜の如きものの中に蔵せられて」いるとし、それを描くには「いくつかの物語」の連作方式しかないと露伴は考えたという。その方法によって展開される壮大なロマンが漱石をひきつけないはずはない。いつかはこの方法によって小説を書きたいと、漱石は考えたにちがいない。しかも兄貴分の子規が露伴に熱をあげており、漱石に推賞したのは『風流仏』のほかには、四年あとに書かれたこの『風流微塵蔵』であろうと考えられるのである。『漱石研究年表』によれば、明治二十六年は子規が帝国大学文科大学を退学している。しかし漱石との往来は繁く、たがいに大きな影響を与え合っていると考えられる。『風流微塵蔵』の構想が話題にのぼり、漱石の脳裏に鮮かな影を落としたのではないかと推定するのである。

二

ところで、漱石の構想に対する評価はさまざまである。桶谷秀昭氏は『増補版夏目漱石論』[6]で次のように批判している。

事実七つの短篇から成るこの小説の前半は、すでに多くの評者の指摘するように、主題が鮮明になるまでに作者が道草を食っている感じが強い。

この批評によれば、漱石の構想は「面白いもの」を創りあげるためのものであったが、現実の作品は「面白」くないものになったということになる。どんでんがえしという手法は、読者を「面白」がらせるものである。漱石の構想もそれに近い形をとっているが、読者にそれぞれの予想を抱かせて、最後にそれをひっくりかえすという意外性がこの作品にはないということもあろう。

佐藤泰正氏は「物語は作者の予言通りつかずはなれずという種々なる挿話の連鎖というかたちをとる」[7]という言い方で、「道草」という厳しい表現はしていない。しかし、漱石が自ら批評している「結末」という章の「森本に始まつて松本に終る幾席かの長話は、最初広く薄く彼（引用者注、敬太郎）を動かしつゝ、漸々深く狭く彼を動かすに至つて突如として已んだ。けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである」という文を引用して佐藤氏は、「彼は螺旋の深まりと共に外界にはじき出されてゆく」と述べている。語り手が途中

で姿を消すのは意外な展開である。そして、その後の「須永の話」は別の話手が出現した感をぬぐえず、その意外性は、「面白い」壮大なロマンを創造するには程遠いということになる。

しかし佐藤氏は、さらに越智治雄の『「彼岸過迄」のころ――一つのイメージ』の次の文を引用している。

> 敬太郎の探偵は、われわれを人間存在の深所に導く一つの方途であった。

話がもとにもどった感があるが、構想は作品が描かんとするもののためにある以上、「人間存在の深所」という「描かんとするもの」をいかなる構想で描くかは、何度でも考察しなければならないものであろう。その「深所」にあるものとは何か。それは「愛」である。須永と千代子の愛。この根元をさぐるのがこの作品の存在理由である。構想とその方途。ここでは、まずその方途についての評価を問うた。それは、以上のごとく芳しいものではない。ただ越智治雄のいうように「敬太郎の探偵は（略）一つの方途」であり、「深所」をさぐるためには不可欠の道である。その道には雑草が生えていただろう。それを取っていたのは「道草」だったかもしれない。これは桶谷氏もいうように「漱石の作家としての迷い」ということはいえよう。

では、坂本浩氏の考えはどうであろうか。氏は『近代文学論攷』の中で漱石の構想を「一年間の業務不履行への申し訳なさが、第一級の作家漱石をあえて第二義的な制作道へと追い込んでいった」[8]と手厳しく批判している。具体的には次のようにいう。

> 敬太郎という人物は人間的な深みに乏しい男で、彼によって観察され物語られる主人公たちは皮相な外面しか見せてくれない（略）。漱石は制作の最初から『夢十夜』的な面白さを描出することは考えていなかったことが想像できるのである。

敬太郎が深みのない人物であることは確かである。彼は猿まわしの役である。しかも、その役すら「突如として已んだ」。『風流微塵蔵』の連環方式を採用しても、ついに大ロマンを創成することはできなかった。『夢十夜』は連鎖方式をとらない。一つ一つが独立した作品である。一つがそれのみで珠玉である。『彼岸過迄』も、そのうちの一篇だけでも一応独立はしている。ただ、それは珠玉の光を放たない。つながっていくことによって意義を明らかにしてくる作品である。一つだけでは、その描くところは「皮相な外面」しか見せないことは確かである。これを、全く異なる詩的な作品の集まりと肩を並べるものに仕上げようと考えたはずはない。言ってみれば、なんといっても詩と散文との相違がある。詩は言葉の結晶を並べる。散文は綿密に多くの言葉を並べる。漱石の創作態度は連鎖方式による多くの言葉の壮大な精神宇宙の構築であったが、この時期は大作家漱石にとって不幸であった。ロマンはところどころに破綻を生じた。まず、まとめ役がじゅうぶんに働かない。登場人物の内面が迫力を欠く。これらを坂本氏は批判したものと考えられる。

三

ところが、構想のありかたについて大岡昇平は『小説家夏目漱石』[9]の中で次のように述べている。

短い挿話を一つの性格で統一した最初は世界文学ではセルバンテスの『ドン・キホーテ』（一六〇五――一八年）だということになっています。（略）短い話をつなげた滑稽な諷刺譚にするはずだったらしいのです。それが書いているうちにだんだん考えが変って来て、サンチョ・パンサという連れの男、これがまたおもしろい脇役なのですけれども、何とかいう島に行って、島の領主になって行政的手腕を発揮するというふうに主題は広くなり、ユートピア譚の性格を持ってくるわけです。

昇平は『彼岸過迄』を「わりあいに好きな作品です」という。そして、世界文学を見わたすと、十七世紀に書かれた『ドン・キホーテ』が「短い挿話を一つの性格で統一した最初」のものというのである。ところで、英文学者夏目漱石が、スペインはラ・マンチャの郷士ドン・キホーテの騎士道物語を知らぬはずはない。騎士として、世の悪を正さんと遍歴の旅にのぼるという面白さはないが、敬太郎を舞台まわしにして、異色の人物や場面を次々に描いていけば、読者の興味をひくにちがいないと考えるのはありうることである。

これによると、前述の『風流微塵蔵』説はどうするのかということになるが、漱石の構想は、どちらか一つによったものとすることはないであろう。どちらの影響も受けたと考えることができる。さらにつけ加えれば、『伊勢物語』も在原業平と考えられる男が、それぞれの短篇の中心となって、全体を「一つの性格で統一」し、読者の興味をひきつけている。これは『ドン・キホーテ』より遥かに古く書かれたもので、『源氏物語』も含めて、日本の作品こそ『彼岸過迄』の「個々の短篇を重ねた」手法を用いた点で、漱石の構想の原拠となりうると考えることができると思うのである。

また、この作品の構想の次の問題点として、その連環体の最初の部分について、昇平は「『彼岸過迄』の最初の、ほとんど半分の部分が、推理小説仕立てになっているので、一般の漱石研究家からはなんとなく低く見られているのですけど、私は中学生の頃、最初に読んだときから、おもしろかったのです」といっている。推理小説は世に氾濫し、手軽に時間をつぶす娯楽小説であるので、研究家も低く評価することになろう。しかし漱石の仕立ては形の上での相似である。昇平は「『彼岸過迄』では（略）敬太郎という平凡な主人公の見た平凡な日常生活として描かれている。そこで微温的という人もいますが、私ははじめの推理小説的な部分といっしょに、そこが却って面白いのです」と言っている。私のこの論文の後半の主題「愛の姿」と関連してくるが、「恋愛心理の矛盾、出生の秘密」などという、評家から高く扱われる次元と、この前半の推理小説的なところや「八卦を信じたり」する話の次元とが並んでいる。この「微温的」な話が実は人生のありのままの姿であり、それこそ人生の秘奥をさぐるものの対極に立ち得る真実の姿にほかならないと、昇平は考えるのであろう。まとめとして昇平は、この二つの次元の並んでいるのが「この作品の魅力になっていると思います」と断定している。

しかし、構想の上で、この点はもう少し角度を変えて考えなければならぬであろう。時代が逆行するけれども小宮豊隆は『漱石の芸術』[10]の中で、まず敬太郎について次のように批判している。

数珠の紐であつただけに、一つ一つの珠の中を通り抜けて、通り抜ける事によつて言はばばらばらな珠を一つに繋げる役目を果してはゐるが、然しそれ自身この『彼岸過迄』の中で、人

間としての特別な世界を示してゐない。

これが多くの評家の説の一つである。しかし豊隆は右の文に続けて「敬太郎が前景に出て来て活躍し、自由にいろんな世界に首を突つ込んだ方が、読者はいろんな場所に起つたいろんな事件を知り、絶えず局面が変化し、絶えず複雑・多彩な生活に面接してゐる気がする、利益がある事も考へられる」と書いている。昇平と理由は違うが、敬太郎を数珠の紐に仕立てた効果を力説することによって、構想上の成功を認めているのは多くの評者と異なるところである。

それに敬太郎が、はじめは田口を「始終何者にか縛られて自由に動けない窮屈」な人物と感じていたのに、あとになって松本から「あゝして長い間人を使つてゐるうちには、大分騙されなくつちやならないからね。（略）気が許せないんです」と説明されて、田口とはそういう人間だったのかと敬太郎が納得し、読者も納得すると豊隆は書いている。これは、前述の特異な構想に加えるに、その中に描かれる人生の真実を昇平と同じように感じとっていたと思われるのである。

人生の真実は前述のように、この論の後半のテーマであるが、豊隆は構想と人生とを次のようにからませて考えている。「漱石の探偵が内面的なものになる為には、一度敬太郎のやうな探偵的傾向を通過する必要があつた」と。そしてその考えをさらに深めるものとして次の文を書き継いでいる。「敬太郎は鼓膜を通して人生の知識を豊富にするにはしたが、然し結局はその中に這入る事が出来なかつたのに反して、須永はその渦の中に捲き込まれ、浮きつ沈みつしながら、敬太郎には十年かかつても、到底獲得する事の出来ない貴重な体験を、その苦悩を通して贖ふのである」と。この構想上の考察は、昇平の考え方の先駆といってよい。昇平の、「微温」が実は人生のありのままの姿であるというのは、微温を高く評価する理論である。評家の多くは「微温」を低く扱う。人生の真実からははるかに隔たっているという考えである。この考え方はオーソドックスなもので、否定しがたいものである。しかし昇平は、それをそれとして認めながらも、表面の「微温」は、後半の真実と底でつながる同根のものであることを発見して「面白い」といっているのである。そして、豊隆のいう「探偵的傾向を通過する」というのは、昇平のこの論法と同じではなかろうかと思われるのである。

四

さて、後半のテーマである「愛の姿」について考察しよう。「愛」は須永市蔵と田口千代子とのそれである。周知のごとく、この市蔵が『彼岸過迄』の実質的な主人公である。「名作集」の中には、この「須永の話」だけを収載しているのもあるほどである。

須永の母は、田口要作に嫁いだ妹に女の子が生まれると、その場でこの子が大きくなったら市蔵と結婚させてもらいたいと頼んで承諾された。その女の子が千代子であり、市蔵と千代子は小さい時から許婚という間がらであったわけである。しかし「須永の話」の六節で市蔵は次のように敬太郎に話している。

二人は固より天に上る雲雀の如く自由に生長した。絆（きづな）を綯（な）つた人でさへ確と其端を握つてゐる気ではなかつたのだらう。僕は怪しい絆といふ文字を奇縁といふ意味で此所に使ふ事の出来ないのを深く母の為に悲しむのである。

「奇縁」という意味で、この「絆」という文字を使わないとはどういうことか。それは、母の願いを拒絶することなのである。「奇縁」とは、珍しい縁を肯定する心持ちを含むことばである。ところが、市蔵は「絆」を肯定の意味で使ってはいない。拒絶しているのである。それでは、何が市蔵にそういわせるのであろうか。以下、それを追ってみよう。

梶木剛氏は『夏目漱石論』[11]で「そう言わせる」ものを次のように指摘している。「須永にとって千代子は、結婚の対象としてあらたな感動をもって考えるには余りにも近しい存在だったのである」と。これは、伊勢物語の「筒井筒」と逆の場合だと考えるのである。二人は「恥ぢかはして」いない。ところが伊勢の場合は、「大人になりければ」とあり、幼いころの無邪気な「あそび」が、成長してからは「恥ぢかはし」に変化している。須永の場合はちがう。そしてその理由は「あまりにも近しい存在だつた」ことにあると梶木氏は述べている。

以上の梶木氏の考えを検討してみる。上記のように氏が考えたのは『彼岸過迄』の次の文にもとづくであろう。同じく第六節である。

子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆んど同じ家に生長したと違はない親しみのある少女は、余り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に対する普通の刺戟を与へるに足りなかつた。

漱石が「近過ぎる」と書いたのを率直に受けとって、梶木氏は「余りにも近しい存在」という。これが市蔵をして千代子を愛せしめない理由だというのである。

これ以外の考え方としては、伊豆利彦氏の次の指摘がある。

若い美しい女に心を惹かれることはあるが、「其顔と其着物が何う果敢なく変化し得るかすぐ予想して、酔が去つて急にぞつとする人の浅間しさを覚える」（V・十七）という須永である。[12]

ここで「V」というのは「須永の話」の篇をさし、「十七」はその第十七節をさしている。「心を惹かれる」は漱石の文章では「普通以上に精密な注意を払ひ得る男なのである」と書かれている。市蔵のこの傾向は『猫』の第二回の中にも同じように書かれており、「元来主人は（略）決して婦人に冷淡な方ではない。嘗て西洋の或る小説を読んだら、其中にある一人物が出て来て、其（それ）が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱（傍点原著）には恋着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは真理だと感心した位な男である」とある。もっとも「若い女殊に美くしい（ママ）若い女」と漱石は十七節で書いているので、「大抵の婦人」とは条件が異なるが、「大抵」も老婆は最初から除いているであろう。

さて問題は、「何う果敢なく変化し得るか」である。これは実は、「確実に果敢なくなる」というのとほとんど変わらないことを言っているのである。輝く若さを眼前に見て恋着しながらも、その眼は老い衰えた醜婦を二重写しに見ているのである。美しかった小野小町が、老残の身を世にさらしたことは知られており、「花の色は移りにけりな」の歌も有名である。とはいえ、市蔵の場合、千代子は若く魅力的である。そして市蔵も時には千代子から「清いもの」「気高いもの」（十一）を感じている。それに彼女が十二三の時、

市蔵に描いてもらった五六枚の画（「赤い椿・紫の東菊・色変りのダリヤ」）をまだ持っていて、それを御嫁に行く時持っていくつもりだと千代子はいう。市蔵にとっては近すぎて平凡だった千代子であるが、千代子からするとその幼い日々は黄金に輝いているのである。そのことを千代子が告白する。それでも市蔵の二重うつしは依然として変わらない。渋紙色の顔、皺に埋もれた醜い顔が二重になって見えるのである。

また市蔵が千代子と結婚したくない理由として次のことがある。十二節から引用する。

千代子が僕の所へ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならない。（略）彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る権力か財力を攫まなくつては男子でないと考へてゐる。

市蔵は高等遊民である。大学の法学部を優秀な成績で卒業しても就職しようとしない。父の遺産がそれをさせてくれるのである。漱石も実現はしなかったが、そうした生活を望んでいた。だから、『猫』や『それから』などに高等遊民を描いた。次に漱石はまた名誉を欲しなかった。文部省から文学博士の学位記を送って来ても、これを返送して受け取らなかった。ただの夏目金之助として生きていきたいのである。「財力」も軽蔑している。『猫』の第三回で金持ちの金田夫人を嘲笑する。金権を蔑視し憎悪する。こういう漱石の分身が市蔵である。ところで、世の常として、千代子は名誉や権力と財力をつかむことを男に要求するはずである。こういう女と結婚すれば、女が失望することは明らかである。そこにも市蔵の千代子と結婚したくない原因がある。

五

さて、それでは市蔵はどのような女を好しとするのであろうか。二十六節に次のような記述がある。

作は固より好い器量の女でも何でもなかつた。けれども僕の前に出て畏こまる事より外に何も知つてゐない彼女の姿が、僕には如何に慎ましやかに如何に控目に、如何に女として憐れ深く見えたらう。

作は小間使である。しかし市蔵はその「慎ましやか」さを賛嘆する。「控目」を評価する。それらを総合して「女として憐れ深く」見ている。「憐れ」は市蔵の心の底にしみ入るものである。市蔵が発する女性への最高の評語であろう。

ところで、この作に対する記述は、『坊つちやん』における清に対するそれと似ている。清は「十年来召し使つて居る」下女である。坊っちゃんが兄の眉間を割って、父が坊っちゃんを勘当するといってきかない時、清は「泣きながら」あやまってくれて、父の怒りが解けた。清は「あなたは真つ直でよい御気性だ」とほめる。坊っちゃんは「御世辞は嫌だ」という。「すると婆さんは夫だから好い御気性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る」。坊っちゃんにとって、清の愛情が分からない。父も母も兄も、坊っちゃんを「持て余してゐる」のに、清だけは「好い御気性です」とほめてくれる。坊っちゃんには分からない。しかし、こういう素朴な女を坊っちゃんは愛する。作もそうである。「慎ましやか」や素朴さ、こ

れが「憐れ」ということになるのであろう。「憐れ」とは、心をひきつけるものである。心の琴線に響くものである。坊っちゃんはそういう女を愛し、市蔵もそれを「女として」よしとする。

漱石もそういう女に心をひかれたのであろう。新書版全集第三十四巻[13]に談話「僕の昔」があるが、その中で「『坊つちやん』にお清という深切な老婢が出る。僕の家にも事実はあんな老婢がゐて、僕を非常に可愛がつて呉れた」と述べている。作者の身辺にいて、自分の心をひく女性をモデルとして描く。その点で、作も清と似た素朴と「控目」とを持った、漱石にとって好しとすべき女性であったのであろう。

ここで、千代子にもどろう。幼い時からいっしょに遊び、女のほうは強い愛情を寄せている。にもかかわらずその女を市蔵は好きにならない。いや、好きでないわけではない。「須永の話」の九節に次の文がある。

> 彼女が、一人ぼつちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕は不図可憐な心を起した。夫で席に着くや否や、優しい慰藉の言葉を口から出す気もなく自から出した。すると千代子は一種変な表情をして、「貴方今日は大変優しいわね。奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちや不可ないわね」と云つた。

「可憐な心」というのは「慎ましやか」だと感ずる心である。「憐れ」と全く同一の心である。とすると、市蔵は、時に千代子を「憐れ」と見るのである。そういう女は好きなのである。しかし千代子は多くの場合「冷かし文句を並べて、何うしても悪口の云ひ合ひを挑まなければ已まない」（九）女である。それが市蔵を千代子から遠ざける。千代子は、たまたま「可憐な心」を市蔵に感じさせることもあるが、始終そばにいて、市蔵の心をやわらげる存在ではないのである。

ここで今度は作にもどろう。そして、作はどのような女かを作品によってたどってみる。

> 僕は珍らしく彼女に優しい言葉を掛けた。さうして彼女に年は幾何だと聞いた。彼女は一九だと答へた。僕は又突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼女は赧い顔をして下を向いたなり、露骨な問を掛けた僕を気の毒がらせた。

市蔵はそれまで、必要な用事以外口をきいたことはなかったのである。それが、口をきいてみて作の「女らしい所に気が付いた」のである。「優しい言葉を掛け」てみる。すると「彼女の身の周囲から出る落付いた、気安い、大人しやかな空気」を感じる。これを「愛した」のである。市蔵はそれが「僕の頭を静めて呉れたのだらう」と思っている。千代子といると「悪口の云ひ合ひ」がはじまる。これが市蔵をいらだたせる。市蔵は「頭を静めて呉れ」る女性を求める。「作がといふより、其時の作が代表して僕に見せて呉れた女性」を求める。そういう女性の一人として前述の清も存在するのである。

だから清は『坊つちやん』のなかで次のように描かれる。松山中学に赴任して第一日が終わる。山城屋の二階にもどって「昼飯を食つてから早速清へ手紙」を書く。

> 清は心配して居るだらう。難船して死にやしないか抔と思つ

ちや困るから、奮発して長いのを書いてやつた。其文句はかうである。「きのふ着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寐て居る。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寐られなかつた。清が笹飴を笹ごと食ふ夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シヤツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。左様なら」

坊っちゃんにとって「長いの」がこれである。「一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥やせ」の流である。[14]「清が笹飴を笹ごと食ふ夢」というのは、出発する時に来年の夏休みにはきっと帰るといったが、まだ妙な顔をしているので、「何を見やげに買つて来てやらう」と訊くと、「越後の笹飴が食べたい」と、とんでもない方角の土産品を言ったので、「清が笹飴」を食う夢を見たのである。

この清も「頭を静めて呉れ」る女性である。清を創り出した漱石は、才気のある女性は苦手である。だから作品の中では素直な性格の女性を好意的に描く。気の強い、女王のように振舞う女性は男を不幸におとしいれると考える。『虞美人草』の藤尾は男を自由にあやつったが、終局で破滅する。漱石は、そういう美しいが強い女を好まない。器量は好くなくても、心のやさしい女性を好しとするのである。

六

ところで、こうした素朴な女を好み、千代子と結婚する意志のない市蔵が、高木の出現に嫉妬を抱くのはどういうことであろうか。

「須永の話」三十四節に次の文がある。

「まだみんな鎌倉に居るのかい」と僕が聞いた。

「え、。何故」と千代子が聞き返した。

「高木さんも」と僕が聞いた。

高木といふ名前は今迄千代子も口にせず、僕も話頭に上すのをわざと憚かつてゐたのである。が、何かの機会で、平生通りの打ち解けた遠慮のない気分が復活したので、其中に引き込まれた矢先、つい何の気も付かずに使つて仕舞つたのである。僕はふら〳〵と此問を掛けて彼女の顔を見た時忽ち後悔した。

これは須永が大学の「三年から四年に移る」夏休み中の出来事である。高木は英国帰りの紳士である。「恐ろしい事丈を知つた男」市蔵とは違って、明るい性格の青年である。市蔵は高木という名前を「話頭に上すのをわざと憚かつてゐた」。しんねりむっつりと構えている市蔵では、快活にみんなを受け容れる高木と太刀打ち出来ないからである。

しかしここで、うっかり「高木さんも」鎌倉にいるのかと訊いてしまった。平素から気になっていることが、つい出てしまったのである。それを聞いた「千代子の表情が急に変化した」。そして市蔵は「彼女の眼のうちに（略）一種の侮蔑が輝いた」ことを認識している。

これについて瀬沼茂樹は『夏目漱石』[15]の中で、市蔵の心を次のように分析している。

高木にたいする嫉妬は明白であるが、「競争心は未だ嘗て微

塵も僕の胸に萠ざさなかつた」と断言する。「嫉妬心だけあつて競争心を有たない」「自分の矛盾」を反省して、「高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければ居られない神経作用と同じ物だ」と判断する。須永はここに「性質」をこえた自己の人間存在の根柢に巣くう、思議を絶する「怪しい力の閃き」を感知している。

まず作品の本文を引用して、嫉妬心と競争心を共有しない市蔵の心の特殊性を明らかにしている。市蔵は、競争しないが嫉妬はする。結婚の対象としない千代子に愛の競争者があらわれることは耐えられないのである。これはしかし、独善的である。結婚の対象とはしないが、相手が誰かと結婚するのは嫉ましい。これはもちろん「矛盾」している。しかし、市蔵はそうしか出来ないのである。結婚の対象としないのは、対象としてやっていけないことが目に見えているからである。むっつりと快活と。相手が下女でも、快活では市蔵は不愉快を感じるであろう。従順で、あまり口をきかない下女に好意を持つはずである。そうした女と正反対の千代子とは、結婚して、偕老同穴というわけにはいかない。だから、誰かと競争して千代子を争おうとは思わない。しかし、その千代子を奪い去ろうとする男に対して嫉妬せざるを得ない。これは「矛盾」である。この矛盾は市蔵として反省すべきことである。ところがこうした反省は、自殺人の心のなかにあるものであろう。「恐ろしい」が「飛び下りなければ」ならない、という「神経作用」と同じものだというのである。ここまでが作品に書かれている市蔵の心である。瀬沼茂樹はこれを「自己の人間存在の根柢に巣くう、思議を絶する」ものとしている。市蔵の心には、こういう不可思議なものが存在しているのである。

この「思議を絶する『怪しい力』」は後年『こゝろ』の中で細述される。その「先生と遺書　五十六」に次のようにある。

私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを貴方に解らせるやうに、今迄の敍述で己を尽した積りです。

これは、この作品のフィナーレのことばである。「私」というものは「思議」すべからざるものである、と「先生」はいう。心の奥底は、鋭敏な「先生」をもってしても不可解なのである。「先生」は「出来る限り」の努力をもって「己を尽し」、「私」を明らかにしようとする。しかし「不可思議な私」ということばを使わざるを得なかった。[16]

ヌーボー・ロマンの旗手、アラン・ロブ＝グリエは、第四十七回国際ペン東京大会における講演で、次のように言っている。

なま身で生きている世界は、ゆれ動く理解不可能なものである。偶然性にみちている。人間は奇妙なことをやっている。それが現実である。人間は瞬間瞬間になにをやるかわからない。[17]

「理解不可能」は「思議を絶する」と同じであろう。市蔵の場合、それは「偶然」ではなく、その「根柢に巣くう」「怪しい力」であり、避けることのできないものである。いくら千代子に罵倒されても、改めることのできない生得のものである。だから結婚する気はないが、千代子の美点は認めているので、それを奪い去ろうとする高木に嫉妬を感ずる。自分とちがって快活な高木が羨しいのである。それは高木に対する嫉妬であり、幸福になろうとする千代子に対する

嫉妬でもある。

その市蔵を千代子は烈しく非難する。

「貴方は妾の宅の客に侮辱を与えた結果、妾にも侮辱を与へてゐます」

「侮辱を与へた覚はない」

「あります。言葉や仕打は何うでも構はないんです。貴方の態度が侮辱を与へてゐるんです。態度が与へてゐないでも、貴方の心が与へてゐるんです」[18]

「客」とは高木のことである。千代子は市蔵の「態度」を問題にする。その「態度」は「心」が生み出したものであることを指摘する。その「心」とは、市蔵自身の「思議を絶する」ものであろう。この「心」は市蔵にわかっているが、どうにもできないものなのである。そしてそれが、思いもかけない「嫉妬」を生んだのである。

最後に土居健郎氏の説を掲げて、この論を終わろう。氏は次のようにいう。「彼女はある意味で彼にとって実際の母親を補う母親的存在であったということができる。（略）彼女はもっと深い意味で彼の心情に食い入っていた。したがって彼はこの千代子が誰かのもとに嫁し、彼のもとから永久に去るという事態に直面させられた時、甚だしい心の痛みを覚えねばならなかったのである」[19]。これは「先生」を苦しめ続けた「不可思議な」心の解答の一つである。ただ問題は、千代子には「清」や「作」のような「慎ましやか」な包容性はない。あるのは、時に起こる「悪口の云ひ合ひ」である。この千代子は市蔵の「頭を静めて呉れ」ない。こういう女性を「母親的存在」と考えるのは無理である。「嫉妬」は千代子の母性（心のやさしい素朴な女性）に関するものとは考えにくいのではなかろうか。

注

(1) 拙論「『猫』と『坊つちゃん』のおもしろさ」（名古屋女子大学紀要第三十五号〈人文・社会編〉平成1・3）
(2) 『文学概論』（頸草書房　昭和61・1）
(3) 前掲拙論。
(4) 『幸田露伴と樋口一葉』（教育出版センター　昭和58・1）84ページ。
(5) 『新潮日本文学小辞典』
(6) 河出書房新社　昭和58・6。
(7) 『夏目漱石論』（筑摩書房　昭61・11）
(8) 明治書院　昭和61・1。219ページ。
(9) 筑摩書房　昭和63・5。
(10) 岩波書店　昭和17・12。
(11) 頸草書房　昭和51・6。
(12) 『講座夏目漱石』第三巻（有斐閣　昭和56・11）128ページ下3。
(13) 本多作左衛門が、江戸表から妻へ送った手紙の文章。
(14) 東京大学出版会　昭和45・7。
(15) 拙論（名古屋女子大学紀要第三十一号　昭和60・3）
(16) 前掲拙論。恒川邦夫氏の同時通訳による。
(17) 「市蔵の話」三十五。
(18) 『漱石の心的世界』（角川選書　昭和57・11）
(19)